東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

コロナ禍における現代的課題を含む授業における授業形態による生徒の意識変容についての考察: SDGs関連授業の実践をふまえた授業形態の考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属学校研究会 公開日: 2023-08-22 キーワード (Ja): ETYP:教育実践 キーワード (En): 作成者: 桒原, 智美, 大塚, 啓太, 鈴木, みゆき, 岡田, 和美, 村上, 恭子, 前田, 稔, 神山, 加奈子, 朝蔭, 恵美子, 楠見, 仁美, 郭, 詩抬, 杉森, 伸吉 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学附属高等学校, 森林総合研究所, 國學院大学, 東京学芸大学附属高等学校, 東京学芸大学附属世田谷中学校, 東京学芸大学, 和歌山県立紀北支援学校, 東京学芸大学附属世田谷小学校, 広島県因島北認定こども園, 武漢大学, 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000041

コロナ禍における現代的課題を含む授業における授業形態による生徒の意識変容についての考察

― SDGs 関連授業の実践をふまえた授業形態の考察 ―

附属高等学校	桒 原 智 美
森林総合研究所	大 塚 啓 太
國學院大学	鈴 木 みゆき
附属高等学校（司書）	岡 田 和 美
附属世田谷中学校（司書）	村 上 恭 子
東京学芸大学	前 田 稔
和歌山県立紀北支援学校	神 山 加奈子
附属世田谷小学校	朝 蔭 恵美子
広島県因島北認定こども園（園長）	楠 見 仁 美
武漢大学	郭 詩 抬
東京学芸大学	杉 森 伸 吉

目　　次

１．１．研究の背景（意義と目的）…… 66
１．２．研究の内容と計画 …… 66
１．３．研究計画の履行状況 …… 67
２．１．授業実践 …… 68
２．２．結果 …… 68
３．学校図書館の視点から …… 70
４．１．今後の課題と予定 …… 71
４．２．学校図書館の視点からの今年度（2022年度）の授業実践の流れ …… 72
引用文献 …… 72

東京学芸大学附属学校　研究紀要　第 50 集

コロナ禍における現代的課題を含む授業における授業形態による生徒の意識変容についての考察

― SDGs 関連授業の実践をふまえた授業形態の考察 ―

附属高等学校　桒原智美
森林総合研究所　大塚啓太
國學院大学　鈴木みゆき
附属高等学校（司書）　岡田和美
附属世田谷中学校（司書）　村上恭子
東京学芸大学　前田稔
和歌山県立紀北支援学校　神山加奈子
附属世田谷小学校　朝蔭恵美子
広島県因島北認定こども園（園長）　楠見仁美
武漢大学　郭詩抬
東京学芸大学　杉森伸吉

１．１．研究の背景（意義と目的）

現在は実社会で求められる能力も変わり続ける。学習において対面指導かICT活用かという二元論に陥ることなく，最適な組合せにより，個別最適化された学びと，社会とつながる協働的・探究的な学びの実現が必要と言われている。新たなことを学び，挑戦する意欲を育てる授業を探り，試みている。コロナ禍の中，家庭科の授業における実技・実習の可能性としての題材をカリキュラムに取り入れ，実践を行なうことが今日的課題を含む家庭科の授業になると考えている。また，その授業形態の効果と生徒の意識の変容を分析することが，他教科を含む他のカリキュラム場面をも構築する一助となると考えている。

１．２．研究の内容と計画

＜内容＞

2019年度「災害を意識した授業を考える・指導案作り」授業のコロナ禍版を考える授業を実施し，2020年度は生徒によるICTを用いたまとめと発表を取り入れている。2021年度は，予定していた学校図書館でのワールドカフェ方式の授業がコロナのため実施できなくなり，座学での「高齢者」についての学びとなり，一部学校図書館の資料を利用した教育実習生の授業となった。学校図書館と教育実習生のレファレンスリストについて，教育実習生の側からの分析も実施している。詳しくは2021年度日本教育大学協会全国大会にて桒原が口頭発表をしている。また，「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」Webサイトに「高校・高齢者授業」で2021年12月より，レファレンスリストと指導案がアップされている。2022年度は，４月にSDGsに関する座学の授業を実施し，夏休みには環境に関連づけた省エネ設定・省エネ行動を各自で実施した。このような環境の高校2年生を対象として調査研究を進めた。省エネ設定・省エネ行動後にアンケートを取っている。アンケートは，平成15年度環境省の子どもエコ・アンケートをベースにしている。2021年度はコロナ禍，秋に急遽実習ができなくなったり，２ヶ月後に被服実習は実施できたものの，計画されていた学校図書館でのワールドカフェ方式の授業がコロナ禍の対応のため急遽無しとなった生徒たちの意識を分析したが，調理実習は昨年度学校での実施はできず，家庭での実施となっていたが，2022年度は少しずつ活動が許されつつある中での意識調査となった。

授業形態として一斉授業方式とワールドカフェ方式の授業への取り組み方と児童・生徒の意識の違いおよび授業効果についての活動観察とアンケート分析は，2018年度東京学芸大学図書館運営委員会の文部科学省助成授業報告会（2019年12月22日東京学芸大学）において報告。「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」Web サイトとリンクさせながら授業実施をした。1年次の実践は日本環境教育学会2019年5月発行のテキストにワールドカフェ方式として掲載。2年次は，情報をどのように与えていくのが効果的な授業になるのか，学校図書館の本・資料提供を活用し，学校図書館での実施を授業に取り入れ，今日的課題でもある「読書活動」をより積極的に取り入れた授業を実施した。アンケート分析で「21世紀に必要とされる次世代型能力の学び」の要素を探った。

＜方法・年次計画＞

3年次は，通常の状態に戻りつつある，しかしまだ，実習や授業形態などはコロナ禍の制限が少々残り，実施の可能性が見えている中での，座学の環境関連の SDGs 授業と自宅での省エネ行動・省エネ設定の実習を行なっている生徒たちである。話し合い活動の形態の制約あり，調理実習のコロナ禍前と同様な状況での実施はなく，ただし以前に戻りつつある状況の，希望が少し見えている状態である。そのような中での座学，その後の自宅での省エネ行動・省エネ設定の実習，年間を通しての SDGs 授業を実施している途中の状況でのアンケート実施と分析となった。2020年度の授業実践の中で「省エネ行動を実践する」という SDGs を題材とした消費生活に焦点をあてた行動を実際に生徒に実践させ，環境を守りたいと能動的に感じるという効果や生徒の意識変容の喚起があるか，という研究の流れを受けたものである。

2年次は，情報をどのように与えていくのが効果的な授業になるかを，高校を中心に実践し学校図書館からの本・資料提供を利活用したワールドカフェ方式の授業を実施。その後，高校生が自分たちで授業案を考える流れとした。今日的課題でもある「深く考える，自分に戻して考える」ことを積極的に取り入れた授業及びその後アンケートを実施。「21世紀に必要とされる次世代型能力の学び」への関連性のある要素を探った。関連授業について2019年10月日本教育大学協会研究大会（岡山大学）において口頭発表。2020年10月日本教育大学協会研究大会（四国大会）においてリモート発表，2019年8月日本環境教育学会全国大会（山梨県）で関連研究を桒原が口頭発表。3年次はコロナ禍における「食」に意識を向け①コロナ以前②ワクチンのない今と休業中を含めた現在③今後の予想や希望，をタイムラインの視点で考え，生徒が指導案を作成し，指導案を紹介する1分間のパワーポイント動画を作成，ワールドカフェの精神である「否定しない・否定されない」ことを意識して発表し，動画を見合った。消費生活の観点からは，2020年度日本消費者教育学会全国大会において「消費生活に焦点を当てた SDGs 行動と生徒の意識の一考察―高校生におけるエネルギー消費の視点から―」を桒原が発表。日本消費者教育学会「消費者教育」第41冊（2021年9月）研究ノートとして掲載。

１．３．研究計画の履行状況

本研究は，3年計画の2部の3年次目である。申請は2018年度が初年度で，2017年12月に4時間扱いの中学1年選択授業で学校図書館と家庭科室において実施。授業「ワールドカフェで考えよう！」は小学生の「生活科」や中学生での「総合的な学習の時間」へのアレンジの可能性も見え，2018年度は「中山間地域」，2019年度は「災害を意識した指導案作りの授業」を実施。2019年度は対象を①幼児②小学生③中学生④高校生⑤一般の5つのグループに分け，「災害を意識した授業」を生徒自らが考える活動に繋げた。2020年度は「誰かに伝えるためには，自分自身がより深い知識や技能が必要であることを自覚し，学習を深める力と情報を与える。」ことを意識して，自分で授業対象の年齢を設定する思考力や相手に伝えていく力やパワーポイントで音声を入力して発表動画を作る発信力を育てることを意識した授業を実施した。今年度は，学年当初から SDGs についての課題を投げかける

授業を始めて，年間を通じてSDGsを意識させる家庭科の授業をした。

（文責：東京学芸大学附属高等学校　桒原　智美）

２．１．授業実践

今年度（2022年度）は学年当初に座学でSDGsについて学ぶだけでなく，SDGsについての課題を年間を通じて意識させる家庭科の授業を実践した。例えば被服実習のエプロン製作を使っての基礎縫い練習においても図案はSDGs関連のものを考える，残布の活用法を考え，その作品例を具体化する学習など，今まではSDGsと関連なく学習していた活動にSDGsの要素を絡めての授業実践を行った。夏の課題等もSDGs関連の活動を入れ，省エネ設定・省エネ活動を実施している。詳細をここで述べることはできないが，環境に関する意識についての分析を示す。

（文責：東京学芸大学附属高等学校　桒原　智美）

２．２．結果

分析には，本実践を終えた後にGoogleフォームを介して提出された生徒の感想文の内，Q1「あなたは日頃から次の（1）～（10）についてどのくらい行っていますか。」，Q2「Q1を行うようになるきっかけ」，「Q3この授業を経験して気付いたこと」という設問への回答を用いた。Q1は「5：いつも行っている。」から「1：全く行っていない」という選択肢を設けた5段階評定で，Q2は10の選択肢（具体的な選択肢は表2を参照）で，Q3は自由記述で，それぞれ回答を求めた。分析方法として，Q1とQ2の回答者数の集計，及びQ3の形態素解析を行い回答の中に認められた単語（名詞，形容詞，形容動詞）の出現数確認し，それらの単語出現頻度と関係性に基づく共起ネットワーク図の作成を行った。これらの分析には統計解析ソフトR3.5.1及びKHCoder ver.3を使用した。

表1　Q1に対する生徒の回答結果

あなたは日頃から次のようなことをしていますか。（1）～（10）について選択肢から一つずつ選びなさい。	（1）使わないときは、テレビや部屋などのあかりを消す。	（2）使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める。	（3）家で花や木を育てる。	（4）ごみを、燃えるごみ、燃えないごみ、資源ごみなどに分類をする。	（5）地域の人たちが行う地域の清掃に参加する。
いつも行っている。	144	197	66	142	4
だいたい行っている。	60	20	23	60	3
時々行っている。	14	2	34	8	29
あまり行っていない。	0	1	44	9	51
全く行っていない。	2	0	53	1	133

	（6）地域の人たちが木や花を植える時は参加する。	（7）ものは長く使えるように、大切に使う。	（8）家族や友達などと環境問題について話し合う。	（9）鉛筆やノートなどは、環境に良いものを買う。	（10）買い物の時、レジ袋をもらわないように気をつける。
いつも行っている。	6	114	14	23	111
だいたい行っている。	3	92	18	39	77
時々行っている。	6	10	94	72	22
あまり行っていない。	37	4	66	59	6
全く行っていない。	168	0	28	27	4

表2　Q2に対する生徒の回答結果

	環境問題に関心があったから、自分から。	保護者に言われたから、やってたから。	祖父母に言われたから、やってたから。	友達がやってたから。	近所の人がやってたから。	学校で環境について勉強したから。	テレビで見たから。	本で読んんだから。	学校の行事に参加したから。	地域の行事に参加したから。
選択者人数	109	51	19	19	11	91	83	45	12	15
（%）	(49.5)	(23.2)	(8.6)	(8.6)	(5.0)	(41.4)	(37.7)	(20.5)	(5.5)	(6.8)

該当設問へ220名の回答が得られた。Q1の回答結果（表1）を確認すると，（1）や（2）の節電節水行動は多

くの生徒が行っている傾向にあった。また，（4）ごみの分別や（7）ものを大切に使う，（10）レジ袋をもらわない，という行動は概ね意識的に実行されていた。それに対して，（5）地域の清掃，（6）地域の植樹活動へ参加は「全く行っていない」と回答する生徒が非常に多いことが特徴的だった。また，（8）家族・友達と話していることへの回答はばらついており，行っていないとする生徒は多かった。これらの傾向を概観すると，（1），（2），（4），（7），（10）は日常的な行動と密接なもので，且つ個人のみで実行可能な行動，（5），（6），（8）は意識的・能動的に機会を探さなければならない行動で，且つ他者との協働や連携を必要とする環境配慮行動としてまとめることができると考えられる。（3）や（9）への回答にばらつきがあることも，この観点から解釈できる。生徒たちが行う環境配慮行動として，日常生活と馴染むような行動は実行できている一方で，意識的・能動的な行動については実行のハードルが高いことが，Q1の回答結果からは伺えた。

表3　形態素解析によって抽出された単語と出現数（上位50語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
する	796	生活	50
思う	274	トイレ	49
できる	193	考える	47
意識	192	行う	45
なる	169	気	44
ある	146	忘れる	44
消す	139	設定	43
使う	108	良い	43
感じる	91	蓋	41
テレビ	90	実践	41
環境	89	暑い	41
電気	86	省エネ	40
自分	82	家族	37
ない	81	簡単	36
やる	76	抜く	34
つける	67	気づく	33
行動	65	必要	32
部屋	65	つけっぱなし	31
見る	63	わかる	31
照明	63	温度	31
続ける	62	設定温度	30
多い	57	家	29
シャワー	56	水	29
実施	52	夏	27
エアコン	51	場所	27

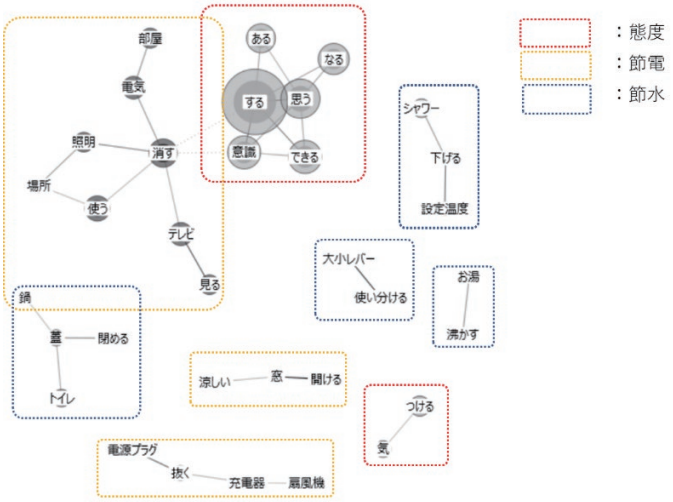

図1　生徒の自由記述回答から作成された共起ネットワーク
※単語を囲む円が大きい程その単語の出現数が多いこと、単語間を結ぶ線が濃い程その単語間の関連が強いことを表す

Q2の回答結果（表2）を確認すると，Q1をより深く検討することができる。多くの生徒は，Q1で「行っている」と回答した環境配慮行動をはじめたきっかけは「環境問題に関心があったから」と回答していた。ハードルは低い行動であっても，まずは自分個人でできる行動から始めてみようということがQ1のような行動の動機になっているのではないだろうか。また，「学校で環境について勉強したから」や「テレビで見たから」，「本で読んだから」といった情報収集の結果として，環境配慮的な行動に動機づけられたとする生徒が一定数いることも確認された。既往研究においても，日常で触れる情報源の影響によって環境配慮的な行動の有用性や意義を学び，行動に至る場合があることは指摘されている（e.g., 広瀬 1994）。それと同様の傾向が確認されたと言えるが，本授業実践を踏まえると「学校で環境について勉強した」ことが環境配慮行動のきっかけに少なからず繋がっていることを明らかにした結果でもあった。

最後にQ3の回答結果（表3，図1）を確認すると，回答傾向は概ね3つに大別することができると推察された。自由記述に頻出した単語の出現数と関係性を見るに，「意識」「する」「できる」「気をつける（「気」＋「つ

ける」)」といった環境配慮的な行動に対する態度を表す語が多く使われていた。また，具体的な行動として節電に関する行動と節水に関する行動が特徴的に見て取れた。Q３は「授業を経験して気付いたこと」を問う設問であり，これへの回答傾向より，本授業実践を経験した生徒たちは節電や節水の重要性を認識し，それに対する態度を顧みたり，より意識的に行うことの重要性を学んだと考えられる。本授業実践が意識的にであれ無意識的にであれ，もともと実行されていた節電や節水行動（Q１とQ２の結果より）について，その重要性を再認識し，より行動に対して積極的な態度を引き出した可能性を指摘できる。ただし，自由記述の回答はあくまで生徒がそう認識したことを示すものであり，本当にそのような学びや態度が習得されたかはより適切な評価項目による検証が必要になる。

（文責：森林総合研究所　大塚　啓太）

３．学校図書館の視点から

本研究関連の中で，今回の分析の対象からは外れるが，授業実施に役割を成す学校図書館側からの家庭科「高齢者」の学習と教育実習生の現状を資料として掲載する。

教育実習生のための授業に役立つ情報収集と学校図書館活用

東京学芸大学附属高等学校は今年度も学芸大学から200名近い教育実習生を受け入れることとなった。教育実習生への学校図書館支援として1.図書館活用オリエンテーション2.実習生図書館活用授業を大きな柱として今年度も行った。家庭科の指導教員からは，学校図書館の関わりとして「東京学芸大学の教育実習生による図書館授業の実習生支援をお願いしたい。高齢者問題に関するテーマごとの資料を活用するので資料支援もお願いしたい。」との内容を提示された。教育実習生との事前の打ち合わせの聞き取り調査の際に「高齢者問題を高校生にも自分ごととして捉えさせたい」との話が出た。具体的なテーマを提示し，それに向けて生徒各自が問いを立て，資料に当たることで内容のある図書館活用授業にする方針を立てた。高齢者関連資料は毎年新しい問題が出てくるため，古い資料は案外活用できないことがある。夏休み中に指導教官から学習の目当てを聞いていた事により，事前に資料を用意できたのは時間的な余裕からもよかった。テーマの一つに「高齢者支援とテクノロジー」があり，教育実習生らしい新しい視点だと感心した。以前から活用されている緊急通報装置，TV 電話などに加えて，AI 活用における対話ロボット，介護ロボット，介護者の負担を減らす高齢者へのデータ分析，高齢者センサーなど最新のテクノロジーでサポートをする専門分野の資料の購入にも努めた。生徒の中には高齢者ドライバーによる事故の多発から自動運転技術への関心も高く，今現在あまり資料として充実していないジャンルではあるが，高校生の探究学習の視点としても「高齢者とテクノロジー」は多様な資料活用が見込まれる分野だと思われる。今後もこの方面への選書に向けてアンテナを張っていく必要があると考える。図書館での授業では生徒間の活発な議論がみられた。教室とは違い，充実した資料が手元にあるので各自の生活体験も踏まえ興味関心のあるテーマに意欲的に取り組む姿が見られた。コロナ禍において生徒間の学びの共有が安全に行われ，有意義な授業時間を過ごすことができた事は，教育実習生が教員となった際の授業における学校図書館活用のいいモデルになると思われる。

以下に今回の教育実習生図書館活用授業で本校図書館が購入した使用資料の一部を提示する。

1.　すぐわかる！ジェロントロジー 日本応用老年学会検定委員会編著／社会保険出版社／ 2019.6 ／ 367.7
2.　ロボットと人間 人とは何か（岩波新書 新赤版 1901）石黒 浩著／岩波書店／ 2021.11 ／ 548.3
3.　地域包括ケアのまちづくり 老いても安心して住み続けられる地域を目指す東京大学高齢
4.　社会総合研究機構編／東京大学出版会／ 2020.9 ／ 369.26
5.　認め合い，支え合う福祉社会の近未来東洋大学福祉社会開発研究センター編集／中央法規出版／ 2022.3 ／ 369
6.　老人入門 いまさら聞けない必須知識20講（ワニブックス¦PLUS¦新書 361）和田 秀樹著／ワニブックス／ 2022.9 ／ 491.358

7.　最期に見る夢 終末期体験の奇跡クリストファー・カー著／新泉社／ 2021.10 ／ 490.145
8.　死にゆくあなたへ 緩和ケア医が教える生き方・死に方・看取り方アナ・アランチス著／飛鳥新社／ 2022.8 ／ 490.14
9.　高齢社会白書 令和4年版　内閣府編集／サンワ／ 2022.7 ／ R 369.26
10.　世界の高齢化と雇用政策 エイジ・フレンドリーな政策による就業機会の拡大 OECD 編著／明石書店／ 2006.4 ／ 366.28
11.　突然の介護で困らない！親の介護がすべてわかる本 高齢の親を取り巻く問…浅井 郁子著／ソーテック社／ 2022.7 ／ 369.26
12.　介護の現場で何が起きているのか　生井 久美子著／朝日新聞社／ 2000.10 ／ 369.26
13.　介護の現場で何が起きているのか生井 久美子著／朝日新聞社／ 2000.10 ／ 369.26
14.　介護施設で死ぬということ 生活支援の場のターミナルケア（介護ライブラリー）高口 光子著／講談社／ 2016.11 ／ 369.263
15.　高齢者に対する支援と介護保険制度 第3版 高齢…（社会福祉士シリーズ 13）福祉臨床シリーズ編集委員会編／弘文堂／ 2015.3 ／ 369.26
16.　落合陽一34歳，「老い」と向き合う 超高齢社会における新しい成長落合 陽一著／中央法規出版／ 2021.12 ／ 369.26
17.　超高齢社会における「老い」のあり方と「介護」の本質 川西 秀徳著ミネルヴァ書房／ 2021.7 ／ 369.26
18.　30 ～ 40代独身のための親の介護と仕事を両立させる本　上原喜光　秀和システム／ 2010 ／ 369.26

（東京学芸大学附属高等学校　司書　岡田　和美）

４．１．今後の課題と予定

昨年（2021年度）の家庭科実習に対して生徒が抱く嗜好とコロナ禍における本実践への印象との比較では，2019年の本授業実践は，ワールドカフェ方式に着目しながら対面方式を取っていたが（杉森他2020），2020年度からはコロナ禍の影響によって対面ではあっても前を向くことが前提の授業が展開されてきた（桒原他2021）。しかし，本実践の開始からの流れは生徒間の自由な意見交換の場を提供することに注力してきた経緯があった。2021年の分析によれば，例えば調理実習が好きなら被服実習やグループワークも好きと捉えている生徒が多いことが示唆されたが，他の実習には相関がなく，ワールドカフェ方式が好きな生徒と調理実習や被服実習が好きな生徒は必ずしも一致しないことが示された結果となった。グループワークが好きな生徒も嫌いな生徒もコロナ禍で実践するのが大変だという印象を抱いており，対面で交流することに制限があり不満，或いは，交流をやらないよう制限して欲しいという思いがあったことが伺えた。家で実習させる場合はビデオ会議アプリなどで交流が可能な形で実践させる工夫をするなどが有用かもしれないとの推察もされた。昨年分析した「ワールドカフェ方式を取り入れた事に対する生徒が抱いた印象の把握」では，ワールドカフェ方式を好意的に捉える生徒は肯定的思考が高く，ワールドカフェ方式を多くの生徒に経験させ，それを好意的に捉えられるような授業実践を進めることができれば，より多くの生徒に制限がある中での実践でも生徒の不満や不都合感を多少は解消できるかもしれないとの知見を得た。その点を踏まえて，2023年度は，ワールドカフェ方式を取り入れた学校図書館での授業を考えながら，今年度の SDGs を軸に据えたカリキュラムを考えていくことが有効である。2020年度の実践にて新たに1分間パワーポイント動画を取り入れることの効果を確認できたことは今後の足掛かりにできるだろう。コロナ禍における授業としてのアクティブな学びの可能性と，児童・生徒の側だけでなく，大学生の学習教材となり得る形を精査していきたい。昨年（2021年度）分析の自由記述より，“否定されない”ことに関するデメリットが浮き彫りになったことにも注目すべきである。“否定されない”ことは発言することへの萎縮を緩和し，

自由に意見を引き出すことに貢献すると予想されるが意見を交換することに関して言えば，批判的な意見から得られる，自らの意見を深める為の学習要素についてもその効果を精査していく必要がある。

（文責：東京学芸大学附属高等学校　桒原　智美，東京大学研究員　大塚　啓太）

４．２．学校図書館の視点からの今年度（2022年度）の授業実践の流れ

もう一つの本研究の課題として学校図書館の活用がある。これまでも「教育実習生のための授業に役立つ情報と学校図書館」を意識して実践をしてきた。本学附属校ではコロナ禍もずっと教育実習生を受け入れている。対面で行なっていた指導を一部画面越しに行うなど，以前とは情報の発信を変えねばならない現状があった。

2021年度の家庭科の教育実習生の授業テーマは「高齢者」であった。高齢者学習は以前から他教科でも取り上げられるテーマの一つである。文部科学省や厚生労働省から団塊の世代による2023年からの高齢者問題が指摘されていて，学習テーマとして高校でも学習課題として大切に扱っている。昨年，授業者である教育実習生への聞き取り調査で「ノーマライゼーション」を意識した学習をしたいとの意向をうけた。以前の高齢者支援は施設の確保や入院看護の必要性を掲げているものが多かったが，近年では，在宅医療や在宅看護の充実を目標とする意識が高くなってきている。その点を踏まえて教育実習生には資料の提供を心がけた。東京学芸大学の「先生のための授業に役立つ学校図書館データベース」は教員の授業をサポートするために設立したサイトである。司書のサポートのもと，このデーダベース用に授業の狙いや生徒への資料の提供を意識づけた資料を作成させたいと考え，授業を充実させるために教育実習生には最初にブックリスト作成を依頼した。選書基準は授業者である自分が活用した資料，学習を深めるために生徒に紹介したい資料の両面を考えてもらった。出来上がったブックリストから実習生の授業者としての視点や日頃からどのくらい研究資料を読み込んでいるか，資料へのアンテナの張り方の差異などが読み取ることができた。ともすると短い実習期間において，一方的な情報の提供に陥りがちな状態がブックリスト作成により，実習生同士の情報の共有となったことの意味も大きい。今後の展開としては，実習生が作成したデータベースを図書館活用で実際に活用し，他の授業場面で検証してほしいと願っている。「学校図書館で授業ができなくて本当に残念でした」との言葉を残した昨年の教育実習生の努力を今年度は，短時間ではあるが学校図書館を活用した授業を行い，東京学芸大学の「先生のための授業に役立つ学校図書館データベース」の HP に指導案等をアップすることができたのは成果である。

（文責：東京学芸大学附属高等学校　桒原　智美）

引用文献：

広瀬幸雄 ,（1994）．環境配慮的行動の規定因について.

杉森伸吉，鈴木みゆき，桒原智美，大塚啓太，齋藤大地，朝蔭恵美子，村上恭子，岡田和美，青山ひなよ．（2020）．今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察：学校図書館活動を取り入れた防災関連授業の実践をふまえて．東京学芸大学附属学校研究紀要，（47），47-53.

桒原智美，鈴木みゆき，大塚啓太，村上恭子，朝蔭恵美子，岡田和美，青山ひなよ，杉森伸吉．（2021）．今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察：SDGs と非常事態下の食事：コロナ禍，SDGs を意識した食の授業を考える．東京学芸大学附属学校研究紀要，（48），73-79.

参考文献：

和田明人，音山若穂，上村裕樹，利根川智子，青木一則，君島昌志，駒野敦子，日野さく．（2012）．保育実習指導における対話と協同（その１）ワールド・カフェの試行と効果 . 東北福祉大学研究紀要，36，235-250.